

型、また飯田らの中年女性の幻覚・妄想精神病の類型化によれば理想希求型に近いといえる。基本的病理としては飯田らの指摘通り祖父（父親代理）との畏敬と憎悪の両面的感情を伴う濃厚な対象関係および母親との希薄な対象関係に基づく祖父への呪縛が存在した。

この症例に対する心理療法の成功に関与した要因の第一点は、患者の基本的病理である祖父転移を治療関係の中で引受けそこで支えたこと、即ち転移を支えることが病者の非現実的理想希求をより現実的なものに変化させた点であろう。第二点は妄想の操作の前に妄想の背後に存在すると思われる対人関係の歪みにかなり充分な操作が可能となったことである。これらのことから妄想の心理療法には、妄想の現実検討をする以前に、妄想の背後にある対人関係の問題や転移をどう処理するかがむしろ重要な意味をもっていることが指摘できよう。このような症例に対して薬物に心理療法を併用して行くことの重要性が窺われるのである。

## 2. 一非定型精神病患者の症状寛解過程について

坂戸 薫・佐藤 哲哉（新潟大学精神科）

25才の女性の非定型精神病の一症例について、その寛解過程、治療の対応に重点をおいて検討を加えた。

患者は入院時より躁症状、独語・空笑、血統・家族否認妄想、幻聴、心気症状などを主に示していた。入院直後より大量の抗精神病薬の投与にもかかわらず病像の改善は認められなかった。また多彩で執拗な心気症状を頻回に訴えて面接を要求してくることも目についた。主治医の説得や保証にも応えず治療関係は膠着状態となっていた。

そこで我々は心気症状に着目し、それを通して患者に受容的な接近をはかり、適当に甘えさせつつ支えていくという態度を首尾一貫してとった。

次第に症状は段階的変容を示して寛解していった。便宜的には次の三期に症状の変遷を分けることができた。

1) 躁症状、妄想・幻覚症状が主体で、他者との交流はあまり持たずに自閉的な気分高揚感に浸っていた時期。

2) 妄想・幻覚症状が消失し、心気症状が徐々に改善しつつも心気症状が主体となった時期。特に躁症状においては、分別なく現実の対象を求めていくといった質的变化が認められた。

3) 心気症状が改善し、ほぼ寛解状態となった時期。特にこの時期においては、主治医に対する依存的欲求が明確に意識化されてきたことが認められた。

考察ではまず診断について述べ、続いて臨床経過につ

いて若干の検討を試みた。

### I. 診断について

DSM-III による操作的診断では双極感情障害、躁病性、気分と調和した精神病像を伴うものとすることができ、従来の診断では、いわゆる非定型精神病ということになるが、どちらかといえば感情病圏に属するものと考えられた。

### II. 臨床経過について

我々は心気症状への精神療法的な対応が病相の変化、すなわち躁症状の質的变化をもたらした可能性に注目し、次の二点を指摘した。

① 少なくとも本症例においては、その症状階層間の相互の移行は生物学的要因のみならず病期における患者と周囲との対人関係の質にも基づいていると考えられた。一般に非定型精神病の経過には生物学的要因が重視されることが多いが、心理的要因も部分的に関与している可能性が存在すると推論した。

② 病相期における良好な人間関係の形成が単に症状の階梯を下降せしめる事のみならず予防治療的な意味を持っていることが考えられた。すなわち病初期における良好な人間関係を形成していくことが心気ないし躁の状態から妄想的段階への発展を阻止するということがうかがわれた。

## 3. Münchhausen 症候群と思われる 1 例について

加藤 佳彦 (厚生連佐渡総合病院)  
佐藤 哲哉・飯田 眞 (新潟大学精神科)

Münchhausen 症候群は、身体疾患を装って各地の病院を転々とし、その都度虚偽をおりませた劇的な病歴を語り、臨床各科で治療者がふりまわされる特異な病態として注目されている。

今回、本症候群と考えられ、DSM-III で身体症状を伴う慢性虚偽性障害と診断された症例を呈示し、心理機制について若干の考察を加えた。

症例は23歳、男性で、経済的に恵まれず、放任主義の家庭で育ち、中卒後職業訓練校を経て、町工場に就職した。その後、多量の唾液の中に少量の吐血があり、胃潰瘍を疑われて数回入院し、検査で異常はなかったが吐血は続いていた。その後、サラ金の返済にからんでヒステリー性の意識消失発作を合併し、大学病院に入院となった。さらに入院後、吐血について異常なしと判明すると、今度は尿管というように、1つの症状に対する器質的異